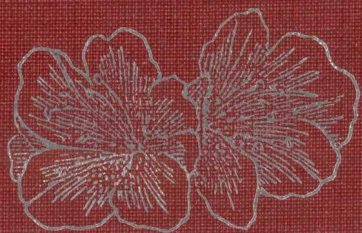


良人の貞操 家庭日記



吉屋信子全集 5



良人の貞操
家庭日記

吉屋信子全集 5

良人の貞操 家庭日記

定価 二五〇〇円

昭和五十年二月十五日発行

著者 吉屋信子

装幀者 中島かほる

発行者 朝日新聞社 岡見璋

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 清美堂製本株式会社

発行所 朝日新聞社 東京・大阪・名古屋・北九州

第五卷 目次

良人の貞操

3

家庭日記

269

あとがき

461

良人の貞操

昭和十一年十月六日——十二年四月十五日

〔東京日日新聞〕
〔大阪毎日新聞〕

朝餉の妻

一

お手製の白ネルの小さい袋の口に、針金を縫い付けた柄を持って、邦子は瀬戸引きの珈琲沸しからドクドクとその袋へ、ジャバとモカを半々にひいた粉を含んで、ドロリとしたのを注ぐと、袋のネル地に濾されたのが、チョコボチョコと下の珈琲碗に湯氣を立てて溜ってゆく。

やっと一杯になると、自分の分は後廻しにして、牛乳入れと砂糖壺を揃えて、卓袱台に置いたとたん、向うの部屋から、

「おい」

と信也の呼ぶ声がした。婚約中と新婚後、しばらくは、「邦子さん」だったのが、「邦子」になり、四年後の今では、「おい」に下落した呼び声だった。

「なんですの？」

邦子も朝餉支度の途中たびたび呼ばれるのは、苦手ゆえ、とても「貴方なあに？」など、生優しく甘い声など出す暇はなかった。

「ちよつと来てくれ」

信也はまた呼び付けた。手をのばせばすぐ取れる紙屑籠一つでも、妻に来て取って貰う良人の物臭太郎に慣らされた邦子は、火鉢の上の金網のパンを気にしながらも、そくさと立ち上った。

襪ぎわに、邦子の簞笥と並んだ洋服簞笥の戸を開け放つて、足は靴下釣を見せたまま、ワイシャツにネクタイを結びかけ、洋服簞笥の戸の裏の墳込み鏡を見詰めながら信也は、

「このあいだ出したクリーニング出来て来ているかい？」

夏の麻の服の着更用の薄茶色の方を、先週洗濯屋へ出したのだった。

「え、もう来てますわ、でも、またあれお召しになるの？」

「うん」

ネクタイを結び終った信也は、その服が出るのを待つ姿勢だった。

「だって、せっかく綺麗になって来たの、もったいないわ、もう夏もおしまいよ、御辛抱なさいよ、まだこれ、そんなに汚れてなんかいいじゃないやありませんか」

邦子は、信也が昨日まで着て出勤した白い麻の服を洋服掛からはずして突き付けるようにした。

だが見向きもせず、

「いいから、洗ったの出してくれ」

と高圧的だった。

「おしやれねえ、いったい誰にお見せになるの？」

邦子は、いささか、ふくれて見せて、押入から、ちゃんとナフタリンまで入れて、いったん箱に納めた薄茶の夏服を取り出した。

「おい、むやみと小さく畳んじや駄目じゃないか、よけいな折目を付けて」

信也はズボンの中程に、横に畳目の付いたのを見て、舌打ちした。

「だって、来年までいらなと思っただんですもの——アイロンかけますわ、少し待って下さる？」

信也は、それには答えず、不機嫌に無言で、ぱつとそのズボンを畳に落すと、邪慳に古い白地の方のを引き取って、着はじめた。

邦子は、その良人の様子を手持無沙汰で見っていたが、これもまた無言で茶の間へ引き返すと、火鉢の上のパンは、黒煙をあげていた。

「大変々々」

慌てて、取り上げて指先ではたいだが、片側が黒く焦げて、そっくり返り、ガリガリだった。

二

邦子が新たにパンを切っているところへ、服を着終った信也が足音荒く入って来て、卓袱台の前で珈琲を掻き混ぜ、ひと口含むなりベツと吐き出す真似をした。

「よくも、こうまで、まずい珈琲を淹れられたもんだな

あ、君はその点確かに天才だよ」

と、ガチャリと珈琲碗を置いた。

「だって、さめてしまったから、まずいのよ」

邦子も抗弁せずにいられたかった。

「熱くっても、冷たくなっても、うまい、まずは同じだよ、第一君は、ただの一日だって、同じ調子に珈琲が出せた日はないぜ、薄かったり濃かったり苦かったり、酸っぱかったり——」

「仕方が無いわ、私機械じゃないんですもの、そう一分一厘違わず毎日同じに出来ないわ」

「機械じゃない——何を言うんだ、そんならもつと智恵のある人間らしく、珈琲の淹れ方ぐらい研究したらどうだ」
「もちろん目下研究中よ、だからいろいろにして試しているんじゃないませんか」

「その御研究中に、僕の胃袋はどうにかなくなってしまふよ、もう研究は願ひ下げだ。明日から、いさぎよく味噌汁と香物に還元してくれ、それが無事安全だ、朝の珈琲なんてものは、僕が次の世に生れ変って、もう少し伶俐な女房を持つまで生涯諦めたよ」

信也はそう言つて、まだ焼けぬパンを、ちぎってネチネチとまづそうに噛むのである。

邦子は、それを横から睨んで、

「何も、生涯諦める事なんてないわ。私、なんなら離縁してあげてもいいわ。そして珈琲淹れるのお上手な奥さんを

幾人でもお持ちなさいまし」

「幾人もなんて要らん、一人でたくさんだ」

「駄目よ、貴方みたいな気難かしい人、一人じゃ背負い切れないわ、珈琲係、服係、御機嫌係たくさんいることよ」

「莫迦を言え、奥さんなんてものは、もう一人で懲りごりだ」

信也は、顔をしかめて、まずい珈琲を一息ぐつと飲み込むと、もう立ち上りざま、そばに揃えてあった二つの新聞の一つを持って、玄関へすたすたと出て行く。

そのあとを追って、邦子が送ると、信也は、沓脱ぎの上を見て、舌打ちして、

「チェッ、もう九月なのに、白靴履くやつがいるか、茶革の出せよ」

「そう、でもあれ工場で油がこびり付いて、なかなか落ちないんで、まだそのままよ」

邦子は、まごついて、下駄箱を開けて出した茶革の靴は、信也が技師を勤めている工場の魚油の揚げ場の流れに濡れた痕が、黒く汚れていた。

「だから、女中でもなんでも置けつてんだ、自分じゃ靴ひとつ磨いてもおけないくせに、莫迦ッ」

信也は、ぶりぶりして白靴を仕方なげに履き、格子戸を逆戻りするほど、ぴしゃっと閉めて門を出た。その狭い門までの敷石の両側に群がって、秋海棠が小鳥の嘴めいた薄紅い茎をのばして可愛ゆい蕾を、もう見せている。

邦子は割烹着の上ッ張りの胸元で、両手の指をからみ合せて、しょんぼりして、いま白服の長身の姿の良人が振り向きもせず、不機嫌な横顔で門前の小路へ曲って行くのを見詰めていた。

今日も残暑の陽が烈しいらしく、その小路のあたり、キラキラと照りつけていた。

出勤の良人

一

信也は上野桜木町の我家を出ると、じきの美術学校の校舎の向い合う道を辿って、その角の京成電車（博物館動物園）の乗場へ入った。

勤め先の同僚は、たいいてい工場附近の尾久に便宜上住まっているが、彼はその新開地を避けて、桜木町に結婚当時から、ずっと棲んでいるのだった。朝夕上野の森の奥から、桜や柳の古木の多い美術学校、音楽学校、図書館などの近くを歩いて、石の円柱を品よく立てて感じのよい、その京成電車の乗場から行き帰りするのを、生活の一つの潤いとして喜ぶ彼だった。

そこから四つ目の町屋の駅で王子電車に乗換えるまでの

途中を、信也は朝持って出た新聞に眼を通す習慣だった。

その日も信也が、ばらりと新聞を開いて、ざっと読んで行くと、その家庭欄に、「アメリカ女性氣質の良人十戒」という見出しで、紐育のカレッジの女生徒達が結婚後良人に望む十ヶ条の希望が報じてあった。

第一条。家事上については妻の絶対権を認める事。

第二条。妻の料理は完全無欠と信じて食する事。

第三条。自分の妻は地球上で最上の美人なりと信ずる事。

信也は、そこを読みながら、いかにもアメリカの女らしい身勝手な言い分に、「フ……」と微笑しながら、次の第四条へ眼を続けると、

良人は朝は必ず朗かに妻に対する事。（朝の良人の渋面は妻の一日を台なしにする）

と、あった。信也はいきなり、ばさりと平手で新聞を叩いて、幾つにも畳んでしまった。

だが、どうも妻の邦子の顔が眼先にちらついて来て仕方なかった。

（なるほど、そうかなあ）と思って、妙な気になった。邦子が十年計画で自分の家を建てるという相談をしてから、女中を雇って（もつとも、新婚当座置いた女中が、次から次へよからぬ成績だったせいもあるが）、万事経済を旨として、あれでも努力しているのだし、むやみと服のクリーニング代を節約したがつたり、珈琲の淹れ方も不十分だっ

たり、靴もああいう始末で、無神経なのは困るが、さりとて何も、叱り飛ばして小言ばかり言い立てるのも、ちと可哀想だったかな。まったく今日一日、しょんぼりして、家に一人で閉じこもっているのだろう——そう考えると、信也は妻が憐れまれた。

彼は乗換えた電車の中でも、腕組みして、何か懨然としていた。

間もなく尾久の熊野前で、信也は降りた。その線路のすぐ前に、荒川郵便局の建物がある。いつもは、そこを足早に通り過ぎる彼が、ふと立ち止った。二、三秒ちよつと考へ込んだが、ついと局の内へ入った。

彼は電報受付口の前で、頼信紙にシャープペンを取って字を書きはじめた。

ケサハユルセ イゴキヲツケヨ

それで、十五字ちよど一音信に収まったから、名は記さずとも、邦子にはわかんと思った。

信也は、それを受付口に差し出した。局員が事務的に文句と宛名を音読した。「ええと——ケサハユルセ イゴキヲツケヨ……シタヤク、ウエノサクラキチヨウ……」

信也は慌ててテレて、一音信の切手を添えると、逃げ出した。

その局を出て、線路を横切り、右手の舗道へ抜けると、その向うの空に、信也の勤める東洋電化工業株式会社工場の大きな煙突が聳えて見えるのだった。

邦子は信也が出たのちは、残った珈琲もバンも味気なく惨憺とした気持で、片付けるのもいやだった。

女学校卒業の頃は、上の学校へ進むつもりで力んでいたのに、娘が結婚するまでは、安心出来ぬ親の焦慮から、信也と結婚させられた。といって、見合の時から、邦子は信也を好ましく感じたほどだから、無理に嫁がせられた訳ではなかった。

だからもちろん今でも信也を、悪い良人などと夢にも思ひはしなかった。でもその代り、結婚生活というものには時々悲観させられた。

男には結婚しても、しないでも、社会だの国家だの、やれ人類だのと論じたり考えたりする余裕があるのに、女はいったん結婚したら最後、宇宙も国家も社会も全人類も消え失せて、ただ一にも良人、二にも良人だけとなり、良人を喜ばせ仕えるために、台所と鏡の前だけが、その全世界となってしまうという事実を、邦子はこの足かけ四年間、身をもって体験したからだった。

（女って、みんな、これでいいのかしら？）と、折々は首をひねって見ても、さて、そんならどうすればいいかという解決は、わからなかった。

そんなら自分は、どうすればいいのか、何を良人に要求すればいいのか、それはわからない——でも、昔も今も変

りなく、「主婦」という体裁のいい名が、実は良人の万年女中に毛のはえた実在に過ぎないような情なさ、たびたび鼻と胸につかえる時があった。

今朝も、運悪くその悲哀を味わわれた気がした。

邦子はしょげて、台所で洗いのをし、家うちの掃除を元気なく終って、やっと割烹着を脱いだ、その時、玄関で、

「水上新さん、電報！」

と呼ぶ声がした。邦子は、はっとした。電報というものは、普通の場合たいてい凶事を思わせるものだったから、邦子も、もしや鎌倉の父がどうかしたのかと、その刹那胸が轟いた。その父は去年軽度の脳溢血を起して以来、寝たり起きたりしているのだった。

そそくさと出て受け取った電報は、信也へ宛てたものだった。開くと、

タミオサクヤキユビヨウニテシス」カヨ

「えっ！」邦子は胸を突かれて驚いた。

民郎とは、信也の従兄弟だった。信也は幼くて両親を失い、北海道帯広市の伯父に養われた。その伯父の次男が民郎で、信也とは同じ年齢で兄弟同様に育った。

その縁で邦子は、自分の女学校の同級生だった加代を、信也と二人で媒妁して民郎と結婚させたのだった。邦子は、まだ母にならぬに、加代は結婚後じき女の児を持つた。

良人同士は兄弟みたいなものだし、妻同士は学校友達で、媒妁までした仲なので、この二夫婦は一番親しい親類づきあいだった。ただ住む処は遠く離れていた。東京と九州とに——民郎夫婦は、福岡の炭坑の社宅に結婚以来いたのである。

その民郎が、突然亡くなったとは——電文には、別に来てくれとは書いてないが、これはともかく信也が駆け付けて行かねばならぬはずだと、邦子は判断した。

彼女は玄関と勝手口へだけ戸締りをして、近くの街通りの公衆電話へ駆け出すようにした。

それと、行違いに、しばらくするとまた電報配達夫の赤い自転車、邦子の留守の門の前へ止った。

電報の来る日

一

公衆電話のボックスは人で塞がっていた。外にも一人次の順番を待つ人が立っている。邦子は、そのあとを待つ余裕が持てなかった。

なんなら、近くの顔見知りの店先で、電話を借りる手もあったが——これまでも何かの時、工場へ電話をかけて

も、信也は工場内にいたり研究所にいたりまちまちで、探し出して電話口へ出て貰うまでが大変だったのを思うと、いっその事自分で電報を持って行った方が確かだと、邦子は考えなおして、心もそらに家へ引き返した。

万一、信也が時間の都合で、工場からすぐ東京駅へ立っても、困らぬようにとも気づかって、大急ぎで、今朝良人に着せ惜しんだ薄茶の服のスボンに、ざっとアイロンをかけ、あの茶革の靴も磨き上げて、髯剃りの安全剃刀、齒磨き、タオルまで入れた小型の鞆一つに納めると、大車輪で家の戸締りをし、火鉢の炭火を灰に埋めて、慌てふためいて、桜木町の家を出て、円タクをひろった。

「尾久の東洋電化の工場知ってる？」

と運転手に念を押すと、

「さあ、あの辺工場がたくさんあるから、行けばわかりまさあ」

と答えた。邦子も結婚以来、初めて良人の勤め先の、その工場へ行くのだった。

やがて見知らぬ町の広い白けた舗道へ車が入って行くと、邦子は、心細げに窓からあちこちを見廻した。荒川の流れに添う、工場地帯の倉庫や煙突が見え出すと、邦子は運転手より早く東洋電化の門を見つけた。

「ここよ、ここよ」

車を止めさせて降りると、邦子はちょっと身づくろいした。鞆などをさげて、その門を入るのが、きまり悪かつ

た。

門柱脇の門衛の控え所の窓の口で、邦子は、はにかみながら、

「あのオ、こちらの水上の——」

と言いかけて「妻」というのはおかしいと思った。二年前亡くなった実家の母親を、父がよく「家内が」と人に言つたのを瞬間思い出して、

「水上の家内でございますが、ちょっと急用が出来まして……」

と言つた。家内などと言つたら、自分がまるで五十か六十のお婆さんになつたような気がした。

「——入つて左手に事務所がありますから、そこへ——」門衛は無表情で、でも丁寧（ていねい）に左の方を指さして、邦子の行くのを見届けるようにした。

行く手の広場の周囲に、別棟の幾つもの鉄筋コンクリートの工場の高い建物を背景に、門からの幅広い通路の両側に、木造の二階建があつた。

邦子は勝手のわからぬ怯け（おそ）を感じつつ、教えられた通り、その左手の入口に入つた。フェルトの草履（ぞうり）は脱いだものの、スリッパは無いので、そのまま足袋（たび）に廊下を踏んで上つて、きよろきよろすると、すぐそばが広い事務室で、硝子戸（がらすど）から丸見えで幾列も並んだ卓子（デスク）に向い合せて、皆上着を取つてワイシャツの袖をまくり上げた人達が、書いてたり話したりしていた。その隅には、洋装の若い女事務員も

二、三人見えた。

受付つて、ないのかしらと、うろろろすると、廊下に向つた硝子戸が開いて、鶯色（うぐいすいろ）の上ッ張りを着物の上に付けた少女給仕らしいのが顔を覗かせた。邦子はそこで、もう一度「家内」という言葉を使った。

鶯色の上ッ張りの娘は、「はア」と答えたまま、ちらりと邦子を見て、その窓際の構内電話の鈴を押して受話器を取りつつ、

「今お知らせしますから、どうぞ、そちらでお待ちになって下さい」

と、告げる口許（くちご）の濃い紅（べに）が邦子の眼に浸（し）み込んだ。

二

邦子の待たされた、その部屋は応接室なのであろう、幾組が板戸の衝立（せうだて）で仕切られた蔭に、同じような卓子と椅子が置かれ、卓上には商店で使う大きな珠（たま）の算盤（そろばん）と会社（かいしゃ）の名入りの用箋（ようせん）が揃（そろ）い、安ものの青磁色（あざむねいろ）の灰皿（はいびん）が載（の）せてあつた。

邦子は、かたくなって、その脚の高い椅子にかしこまっていた。

しばらくすると、コトコトと靴の音が近付き、扉が開き、

「いったい、どうしたんだい？」

信也が、のっけから、こう声をかけて現われた。家を出

る時の身支度と違つて、木綿小倉の霜降地のズボンと詰襟の、まるで田舎の中学生の制服みたいなのを着更えていた。

「あら、ここじゃそんななりしていらつしやるの?」

邦子が、少しがっかりしたように――

「莫迦、そんな事はどうでもいい、それよりなんだって、こんなところへやって来るんだい、驚いたぜ」

信也は、向い合せの椅子に、斜めに腰かけた。

「だって、電報が来たんですもの!」

女だてらに、ここへ駆けつけねばならなかった理由を、まず明らかにした。

「莫迦ッ」

その頭の上に、信也の大きな声が爆発した。邦子はなぜそんなに、どなられるのかと、吃驚すると、続けざまに、
「おい、莫迦もたいていにしておけ、人が甘い顔をしたと思つたら、またもやのこのこ、ここまでやって来るやつがいるかい、人に知れたら恥を掻くぜ――呆れたなあ」

信也は、およそ、まったく呆れ返つて、ものも言えぬとばかり、眉を蹙めた。

「あら、どうして、何が私そんなに悪いの? そりゃあ私だって工場まで来たくないわ、だけど、何しろほかの事とは違つて、大事件でしよう、電話かけようと出たんですけれど、塞がつてるし、ぐずぐずして遅くなるといけないと思つて、第一、加代さんにも悪いし――」

邦子は一生懸命で張り切つて出かけて来た矢先だけに、信也の態度に、おろおろして声さえふるえた。

「いったい、なんなんだ、なんて電報が行つたんだ」

信也は、ハテナ――とせき込んだ。邦子は、手提を開けて、電報を出して、

「貴方、民郎さんが亡くなつたんですって!」

「なに?!!」

信也も顔色を変えた。そして電文を見詰めつつ――

「こりゃあ、どうしても、僕がまず行かなくちゃならないなあ」

「え、だから、私慌てて来たのよ、どうせ行くのなら、少しでも早い方が、向うも有難いと思つて、――まるで他人ばかりの炭坑の社宅のなかなんですもの、加代さんだつて、どんなに心細いか――」

「うん、都合のいい汽車があれば、今からでも、すぐ立とう、それがいいだろう」

「え、そうしてあげて頂戴、私も、そう思つて、そら、ここにお支度揃えて持つて来といたわ」

と邦子はちよつと自慢げに、椅子の下スリッパの靴を指さした。

「そうか、それは大手柄だったな、それじゃ時間表出してくれ、汽車を見なけりゃあ」

信也が、手をのばして、靴を引き上げると、

「あら、私困つたわ、どうしましょう。時間表入れて来な

かったわ。ちゃんと安全剃刀^{安全剃刀}まで用意したんだけど——」

邦子は可愛く困った顔をした。

「ハ、ハ、君のこった、おおかたそんなこったろう、ハ、ハ、よし、事務所^{事務所}にはあるだろう」

信也は、でも小言も言わず、笑って出て行った。

三

「一時半の桜——それにしよう、まだ時間はあるな——で、留守はいつものように睦ちゃんか」

信也は汽車の時間表を、めくりながら戻って来て言った。睦ちゃんとは、邦子の実家の妹だった。

「え、大丈夫よ、睦子呼びますから——やはりここからお立ちになる？」

「うん、そうする、今日は香料入りの石鹼原料の試験中だから、もう一、二時間僕はいなくちゃならないんだ」

「そう、じゃあ私、あとでその時間までに、東京駅へ行ってますわ」

「そうだなあ、その方がいいだろう、鞆^{スラッケー}も来てるんだし」

「あの服も茶の靴も持って来ましたわ、ワイシャツも二つだけ入れて——今お着更え^{おきかへ}になつてしまえば、そのいらない服や靴、私すぐ持って帰っておきますわ」

「そうだな、そうするか」

信也は鞆を持ち上げた。

「どこか、服着更えるような所あつて？」

邦子は、その広い応接室を見廻した。

「倶楽部の二階がいい」

信也は鞆をさげて、応接室を出て行く、邦子もそのあとに従った。

その廊下^での出合頭に、半白の紳士が折鞆^{ゾルトフオリオ}を小脇に抱えて、入って来るのに、信也が出会ふと、彼は慌てて首を鄭重^{ちゆうじゆう}に下げた。

「やア」

老紳士は、軽く会釈して通り過ぎつつ、

「水上君、何か君、どこかへ出張かな」

と信也の手許の鞆を見た。

「いえ——実は今朝突然、親戚に不幸がありまして、これから福岡までちょっと行かせていただきたいのですが……」

信也は慇懃^{ちんしん}な態度だった。

「ホウ、それはそれは、では、これからすぐ、立つのかね？」

「はア、今度の化粧用石鹼^{化粧用石鹼}の原料試験は済まして立ちます。遅くも昼までに、報告書を出せるとおもいます」

信也の顔は、緊張していた。

「なるべく、そう願いたいね、何しろ明日が本社の重役会議だからな、それまでに手許^{てもと}に集めて説明しておきたいから、頼むよ」

「はア、その点十分責任を持ちます」

「ええと、やっぱり Heliotrop^{ヘリオトロップ} でやっているのかな？」

「はア、第一回の見本製品は、それでやらせていただいで、次に、いつかの御意見通り、Musk Ketone^{ムスクケトン}（人工麝香）を高級品にだけは用いて、工場で特に粹煉^{ジュンレン}で仕上げさせて見たいと思います——が」

信也は直立の姿勢で応答している。

「うん、ともかく、うまく成功するように頼むよ、君」

と行き過ぎようとする老紳士に、信也は、少年のように、はにかんで、

「ただ今、妻がその親戚の不幸を知らせにちょうどここに参りまして」

と、もじもじ邦子を指して、口早に教えた。

「技師長の辰野博士——」

すると、技師長の方から、世慣れた態度で、信也の背後に小さくなっている邦子に微笑^{ほほえみ}みかけて、

「お、それはそれは御苦労様でしたな」

「初めまして——主人が一方ならぬお世話にあずかりまして……」

そのあとは、なんと言ったのやら、自分も夢中で、邦子はすっかりあがってしまった。

その技師長への挨拶を終って、二人は事務所の前の工場社員倶楽部へ入りつつ、信也は、

「お前だけこの二階の座敷へ上って少し待っておいで、僕はこれから急いで研究所所長に話をし、工場長へは正式に

届を出しとく必要があるから——」

四

東京駅に信也を見送ると、邦子は急いで桜木町へ帰った。

鎌倉の実家へ、信也が出がけに工場から、すでに電話で、留守中、泊りに来てくれるようにと、頼んだと言うので、睦子が早速やって来て、締出しを喰ってるといけないと思って、気がせいたのだった。

だが、睦子はまだ来ていなかった。残暑の真昼を閉め込んで、むうんとしている家の中の雨戸をがらがらと開けて風を入れ、ほっとひと息した邦子は、慌^{あわただ}しかった今日の午前中の騒ぎのあとで、なんだか、がっくりしたように、疲れていた。

それで、なんとなくぼんやりして、縁側の籐椅子——それも結婚の時、新家庭の祝いに贈られたもので、少々手摺れて、茶色に籐の網目の古びたのに腰かけて、小さい庭に眼をやっていた。

庭といっても、ハツ手や楓^{かえで}が、なんてなしに雑然と植えられて、その庭土の上には、縁日などに、時たま買ってきた草花の鉢が幾つか、すがれたまま置いてあるだけのことだが、でも縁先の柱に近く触れるほど、茂った芭蕉の大きな葉がばさりと揺れて葉に裂け目のたくさん入って来たのが、この庭に秋を知らせる風情の一つだった。